

BOOK GUIDE

ブックガイド

食いしん坊の旅

アルプス・南仏街道編

祐天寺りえ著

著者は1994年からスイスとイタリアの国境に近いフランスのメリベルという村に夫とともに移り住んだ。頼る者もなく、フランス語も出来ないのに、もち前の好奇心と行動力でどンドン村にとけこんでいった。そんな著者がフレンチアルプスから地中海の海岸沿いの都市までの、人々の暮らしぶり、食べ物、ホテルなどを案内したものだ。宿泊先として著者がすすめるのはシャンプル・ドット(chambre d'hôte = 貸室民宿)である。日本でいう民宿のようなものであるが大きなテーブルで家族とともにする夕食は楽しいという。

著者によればフランスのにおいてはチーズの匂いであり、1か月も滞在すると身にしみこみ、成田空港に出迎えた人がびっくりするくらいであるという。(A5判・143頁・1700円・パラダイム出版)

本が死ぬところ
暴力が生まれる

●電子メディア時代における人間性の崩壊
パリー・サンターズ著
杉本卓訳

子どもの引き起こす事件が暴力的になり、ナイフや銃器を用いて人の生命を奪うことが珍しくなくなってきたが、米カリフォルニア州のピツァー・カレッジで思想史を教え、イヴァン・イリイチとの共同作業も手がける著者は、このような事態が、現代の若者たちの活字離れや読み書き能力の低下、つまり識字能力の低下によっておこってくる、と考えている。

本書は、その考え方を口承文化のなかで暮らす人々と、識字化された人間の本质を丹念に比較しながら説くもので、人間はどのようにして自己を形成してきたのかを探り、現代に至ってなぜ識字能力の喪失が自己の形成不全を起こすのかを解き明かしている。そして、この自己の形成不全を阻止する方策としては、もう一度、口承と識字のバランスがとれた生活や教育を取り戻すことだといひ、教育関係者に、このことを留意しながら教育にあたって欲しい、と呼びかけている。(B6判・318頁・2850円・新曜社)

